

第 10 冊

『土偶のリアル』

譽田 亜紀子、山川出版社、2017年
(上)

はじめに

世の中はちょっとした「縄文ブーム」の様相を見せています。なかでも「土偶」の存在価値が異様に高まっているように思えますが、それは気のせいではありません。2014年に東京国立博物館で開催された特別展『縄文-1万年の美の鼓動』には、なんと35万人が来場したそうです。当初の目標が20万人だそうですから、予想の倍近い人々が「5つの国宝土偶」に会いに行ったというのです。

一昔前には「歴女」という言葉が流行っていました。そして「古墳女子」という言葉も登場してきました。そして、土偶に会いに行ったり、土偶のグッズを身につけたりして楽しんでおられる「土偶女子」が登場してきました。

実は、私も2017年秋に京都国立博物館で開催された『京博・国宝展』（国宝展は1976年以来41年ぶりの開催だったそうです）に行った折、3体の国宝土偶（「**縄文のビーナス**」「**縄文の女神**」「**仮面土偶**」）に会うことができました。

この国宝展は209点もの国宝が8週間（4期に分けて）にわたり展示されるという非常に「おいしい」展覧会でした。国宝に指定されている美術工芸品は、2018年現在890件ですから、4分の1が京都に集まった、ということになります。私も2回だけ見に行きましたが、その際、多くの人々が前から後ろから土偶に見入っていました。

さて、2年ほど前だったと思うのですが、「土偶」についてネットで調べていたときに、今回紹介する本の著者の**譽田亜紀子（こんだあきこ）**さんの記事に出会いました。2014年に東京国立博物館で開催された特別展『縄文-1万年の美の鼓動』についての紹介記事でした。ちょうど、私も京都の国立博物館で国宝展に参加して国宝の土偶を見たばかりだったので、興味深く読ませてもらいました。（記事は https://www.huffingtonpost.jp/2014/12/03/kokuhodogu_n_6259538.html にあります。）

自称「土偶女子」の譽田さんの熱いこと熱いこと！！いや、語り口は控えめというか上品なんですけど、奥に秘めた土偶に対する愛情が一言一言にあふれていました。

ですから、「彼女の本を読みたい」と思ったわけです。でも、何冊かあったのでどれにしようか迷ったのですが、決め手は2つありました。

1つは、表紙の写真が「縄文のビーナス」で、ちょうど土の中から現れた直後の写真にインパクトがあったんですね。2つめは、先ほども触れたように実際にこの目で見えた国宝の土偶が3体あるのですが、それもこの本の中で詳しく紹介されていたからです。

読み進むうちに、ふっとあることが思い浮かびました。譽田さんって、今の時代が縄文ならば「シャーマン」になっていたのじゃないかって。だって、土偶を心底、自分の分身のようにとらえているのですから。

ということで、今回取り上げる本は**譽田亜紀子（こんだあきこ）さんの『土偶のリアル』**です。

譽田亜紀子氏は土偶の専門家、学者なのかというと全く違います。生まれは岐阜県、京都女子大学を卒業したあと、広告代理店、会計事務所、通信販売会社などで勤めた後、現在はフリーライターという経歴の持ち主です。取材先で奈良県出土の観音寺本馬土偶に出会い、土偶の世界に引き込まれていったそうです。その後、各地の博物館、遺跡を訪ね歩き、土偶、そして縄文時代の研究を重ね、現在は、テレビ、ラジオ、トークイベントなどを通して、土偶や縄文時代の魅力を発信する活動も行っておられます。それだけではなく、魅力的で面白い土偶の世界を多くの方に知っていただきたいと2014年7月に**『はじめての土偶』**を出版されました。現在は、ひとりでも多くの人に土偶の面白さを伝えるために「土偶女子」代表として活動中です。

その他の著書には、**『にっぽん全国土偶手帖』**（2015年、世界文化社）、**『ときめく縄文図鑑』**（2016年、山と溪谷社）、**『知られざる縄文ライフ』**（2017年、誠文堂新光社）、**『土偶界へようこそ』**（2017年、山川出版社）、**『おもしろ謎解き「縄文のヒミツ」』**（2018年、小学館）、**『折る土偶ちゃん』**（2018年、朝日出版社）などがあります。



なぜ、「土偶」なのか？

あなたは縄文時代と聞いて、まず何をイメージしますか？

貝塚ですか？竪穴住居ですか？屈葬とか抜歯という風俗でしょうか？

私は、縄文と言えば、まず「縄文土器」を思い浮かべます。その前の時代、旧石器時代には「土器がなかった」からです。縄文人はドングリやくるみなどの**木の実の「あく抜き」**をしたり、**貝類などを「煮」**たり、石皿などですりつぶしたりして、食べていました。これは土器がなければできないことです。

ただ、最近、「日本人って何？」「どうして日本人はそんなことを考えたり、したりするのか？」と不思議に思うことが多々あります。歳のせいでしょうか、昔はそんなこと考えもしなかったのですが(笑)。

日本人を理解するには縄文人（縄文時代に日本列島に生きた人々）を理解するのがよいように思うのです。それに、何と言っても我々の祖先を100世代ほど辿っていけば、縄文人になるのですから、「自分探し」にもなるような気がします。

縄文時代のことを理解しようと思ったら、いや縄文人の信仰や精神構造を理解しようと思ったら、何について理解を深めたら良いのでしょうか。

生活の利器である土器や定住生活を可能にした竪穴住居もいいけれど、しっくりこない感じがします（あくまでも直感です）。抜歯や屈葬という風俗は縄文人の信仰を理解しやすいものと思われませんが、抜歯は「痛そう」だし、屈葬は「亡くなった方（の遺骨）」なので「畏れ多い」という気がしてなりません。

その点、土偶はほとんど女性だし、不思議な形や文様もあって、土偶をじっと見ていると「縄文人の心や信仰」が見えてくるような気がします。何と言っても、ほとんどの土偶が「壊されている」のですから、そのこと自体がミステリーですよ！！

そもそも「土偶」って？

土偶も土器と同じように「土でできている」ものですが、**そもそも、土偶って何でしょうか？ 埴輪とはどう違うのでしょうか？**

土偶とは、およそ1万5000年前から2400年前まで続いた縄文時代に作られた**人形（ひとがた）の土の焼き物**のことです。何のために使われていたのか、はっきりしていません。ほとんどが女性像なので、安産や多産を願った人形ではないかと考えられています。発見されている土偶は大半が破損しているので、「壊すためのもの」だったのかもしれませんが。

形は縄文早期や前期では手のひらにおさまるようなサイズで、わずかに人間だとわかるような大まかな作り方ですが、中期になると顔や手足が識別できるようなものになってきます。また、この時期には形に地域差が出てきて、中部地方では立体的な土偶が登場してきます。

後期になると、「山形土偶」や「ミミズク形土偶」などが作られ、晩期には青森などで「遮光器形土偶」と呼ばれる大きな目が特徴の土偶が作られるようになりました。ほかに、「仮面形土偶」「ハート形土偶」などいろいろあります。

一方、**埴輪**はご存じの通り古墳時代（だいたい3世紀半ばから7世紀）に作られ、古墳の上や周りに置いて、墓の主を弔うためのものだったと言えます。はじめは、筒の形をした**「円筒埴輪」**が古墳の周

囲に「柵」として置かれ、「境界を表す」役割を果たしていたと考えられます。なお、円筒埴輪は「**特殊器台形土器**」として知られており、壺を上に乗せるための土器として作られました。



写真は筆者が撮影した高槻市の
今城塚古墳公園の復元埴輪

だいたい5世紀頃になると、武人や巫女の形をした埴輪、馬・猪・犬・鶏などの動物の形をした埴輪、さらに家の形をした埴輪なども作られています。これらの埴輪を「**形象埴輪**」と呼びます。形象埴輪が置かれるようになったのは、墓の主（大王や地方の有力者）の生前の暮らしぶりを再現しようとしたのかもしれませんね。こちらは古墳の丘の部分に置かれることが多いようです。

いずれにしろ、埴輪は古墳を「飾るもの」と考えて良いでしょう。

人類初の土製品は人形？

さて、土偶は日本だけのものでしょうか？それとも、世界各地に見られるものなのでしょうか？

もちろん、土偶は日本だけのものではありません。ヨーロッパ、西アジア、インドなどでも発見されています。世界最古の土偶はチェコ共和国のドルニ=ヴェストニツェ遺跡で発見されています。この遺跡は旧石器時代の遺跡であり、当然のことながら「土器」はありません。しかし、土偶はあるのです。不思議ですね。

なぜ土偶があったのか？

それは、粘土で作られた人形が、たまたま火災に遭って素焼き製品となって残った、のが真相のようです。湖水の岸辺に丸太を敷いて床を作っていた家屋の焼け跡から女性をかたどった土偶が発見されたのです。ですから、日本の土偶とは誕生の経緯が違います。

でも、粘土による人類最初の製作物が「女神」だったのかもしれないのです（女性が女神ならばの話ですが）。

ちなみに、日本最古の土偶は1万2000年前の土偶ですが、2例あるそうです。現在知られている日本最古級の土偶は、三重県で2個、滋賀県で1個が出土した縄文時代草創期後半のもの、すなわち、**粥見井尻土偶**と**相谷土偶**があります。土器や弓矢が使われ始めた縄文時代草創期のものです。

1996（平成8）年9月に三重県松阪市飯南町の粥見井尻遺跡で縄文時代草創期の土偶が、ほぼ完全な形で発見されました。約1万2000年前から9000年前のものです。女性の上半身を形どった、全長6.8cm、幅4.2cm、厚さ2.6cmの小さな土偶ですが、縄文時代の精神文化誕生をひもとく材料になると言えます。

もう1つが、2010（平成22）年5月、滋賀県の永源寺の近くにある相谷熊原縄文遺跡で、全高3.1cm、最大幅2.7cm、重量14.6gの土偶が完全な形で出土しました。1万3000年前の縄文草創期頃のものということになります。

なぜ、「土」偶なのか？

土偶は粘土で作られています。なぜ、石や木や骨などではないのでしょうか？

大半の土偶は女性で、「女神」「精霊」などをあらわしているようです。なぜ、粘土で土偶を作ったのでしょうか？

それは**第1**に、技術的利点がありますよね。つまり、**土には形をある程度自由に作ることができる**という特性があります。しかし、それだけではないでしょう。

そのままでは使いようもない**柔らかな粘土が、焼くことで全く違った堅い重宝な物質に変化**してしまいます。縄文人はそのような「奇跡」に対して**深い畏敬の念を抱いた**のが**第2**の理由ではないでしょうか。粘土で思いのままに形を作り、焼き上げることで強く丈夫な人形を作ることができるというのは、縄文人にとって大きな喜びだったのかもしれません。

さて、土偶の「偶」とは「人の形に似せたもの」「人形」という意味です。

では、石でできた「石偶」とか骨で作られた「骨偶」ってないのでしょうか？

実は「土」偶以外のものも存在するそうです。

旧石器時代の大分県岩戸遺跡の「こけし形岩偶」や縄文草創期の愛媛県上黒岩遺跡の「女神像を刻んだ線刻礫」などが、土偶のルーツだと思われそうですが、はっきりとしたことはわかりません。さらに、縄文前期や晩期にも石で作られた「岩偶」がありますが、数は圧倒的に少ないそうです。

また、「骨角偶」と呼ばれる動物の骨や角などで作られたものもあります。縄文後期の「角偶」は宮城県沼津貝塚から出土していて、鹿の角で作られています。また、北海道の戸井貝塚からも出土しています。

髷田亜紀子さんは『土偶のリアル』のなかで、次のように述べています。

縄文時代の焼き物と言われて、まず頭に浮かぶのは「縄文土器」という人も多いのではないかと思います。その中でも「火焰形土器」といわれる、燃えさかる炎がそのまま土器になったものをイメージする人が大半かもしれない。しかし、縄文土器はあの土器だけではない。地域、時代、用途によって様々な土器が作られた。

土器は1万年以上作り続けられた生活の用具であり、この道具を発明したことによって縄文人たちの生活は劇的に変化した。万能調理器具とも言われる土の器を手にしたことで、彼らの食糧事情は格段に良くなり、人口も増加したと言われている。・・・・・・・・・・・・・・・・

一方、縄文時代のもう1つ重要な焼き物が「土偶」である。生活の中に呪術が入り込んでいたとも解釈できる・・・、生活の道具として存在した土器に対して、彼らの心に安定をもたらすために生み出された人形（ひとがた）の焼き物が土偶である。そこには非常に繊細な文様から、大胆な身体造形、不可思議な顔など多種多様な表現がなされているのだが、実はよく見ると、同じ地域で出土する土器と同じ文様が施されていることが多い。・・・同じ場所から見つかる土偶と土器には共通する文様が施されているのである。

縄文時代草創期、早期、そして前期の中頃まではそれほど多く作られてはいない。その後爆発的に増加する時期を経て、中期後半から後期初頭にかけて、作られる土偶の数がぐっと減ったと考えられている。・・・日本列島の多くの地域から見つかっている事実を考えると、縄文人にとって、なくてはならない存在であったことは間違いがない。

ところで、全国で発見された土偶って、どのくらいあるのでしょうか？ 四択でいきますよ。どれが正しいのでしょうか？

①約1000点

②約5000点

③約1万点

④約2万点

正解は④の約2万点だそうです。多いと思いますか？少ないと思いますか？

3体の国宝土偶

では、これから、私が京都国立博物館で実際に「出会った」3体の国宝を中心に土偶を紹介していきます。まず最初に紹介したいのが「縄文のビーナス」です。

最初の国宝＝「縄文のビーナス」



「縄文のビーナス」
写真は
ウィキペディアより

長野県茅野市棚畑遺跡から見つかった大型土偶は出土したときから「ビーナス」と称されました。国宝に指定された5体の土偶のうち、1995（平成7）年6月15日、最初に国宝に指定されたのが「縄文のビーナス」です。

なぜ、国宝第1号の土偶になったかと言いますと、普通、土偶というのは手足や、胴体、首といったパーツがばらばらに出土されますよね。ところが、「縄文のビーナス」はほぼ完全な形で発掘されました。それだけではなくて、発掘された状態のまま、自分で「立つ」ことができたんです。そんな土偶は今までありませんでした。それだけではありません。出土したときの状況も変わっていました。

どういうことかということ、「縄文のビーナス」は、掘られた穴の底に、壁に向かって横倒しにされた状態で見つかったのです。偶然横向きになったのではなく、わざわざ横倒しにして埋められた、ということがわかっているのです。こんな状況で発見されたケースも非常にまれだそうです。

さて、土偶と言えば、女性。そして、身ごもっているというのが「常識」ですが、この土偶は明らかに身ごもっており、しかもかなり下半身が安定している体型をしています。

この「縄文のビーナス」は、標高880mの霧ヶ峰南麓の日当たりの良い台地状の棚畑遺跡で発見されました。南北2カ所にあった集落は広場を中心に「縄文のビーナス」を取り囲むように馬蹄形に作られており、中央の広場には祖先の霊をまつるかのような墓が作られています。

発掘調査では146軒もの住居跡が南北2つの環状に連なって、中央には1200カ所以上もの穴が見つかりました。ただ、146軒が同時に存在していたわけではなく、一時点では数軒から20軒前後と考えられています。そして、この村は縄文中期の始まりから後期の始まりまで、1000年ほど続いたようです。そして、「縄文のビーナス」は村の中央の小さな穴に、単独で、丁寧に埋葬されていました。役目を終えて葬られた最後の姿は感動的ですからあります。

なお、発見された状態の写真・地図などは「茅野市尖石縄文考古館」のホームページを見ていただければ、詳細に掲載されていますので、是非クリックしてください。

<https://www.city.chino.lg.jp/site/togariishi/1755.html>

発見されたのは、1986年（昭和61年）の9月8日の夕方、まるで「早く出してくれ」とでも言うかのように、頭を出していたそうです。譽田亜紀子さんの本『土偶のリアル』の表紙の写真は、まさに発見されたときの状況を表しています。高さが27cm、重さ2.1kgで下半身の最大幅が12cmというサイズで、左足が外れていましたが、その他は作られた当時の状態を保っていたといえます。

琥珀のペンダントトップやほかの土偶36個、ミニチュアの土器とともに埋葬されていたため、集落の祈りを司る呪術師（シャーマン）が埋葬されていたのではないかと想像されています。琥珀はとても貴重な石であることから、この石を手に入れることができるほどの力を持った呪術師が存在し、副葬品として埋葬されたのではないかと考えられます。

あなたは、「縄文のビーナス」を観て、何を感じますか？ 作者の譽田亜紀子さんは次のように述べています。

私たちがビーナスを通して縄文人を感じるように、縄文の人々はビーナスを通して自然界の霊的存在を感じていたのではないかと想像する。特に子宝に恵まれるように、そして無事に出産できるようにと女性の切実な願いを、ビーナスを通して天に祈ったのではないかと想像する。つるつるに光り輝く背中、縄文人たちが願いを込めて触っていたのかもしれない。ビーナスは集落の守り神として、特別な祭りの際にはシャーマンの道具として使われ、平素は安置されている場所で人々に触られ、安心を与えていた・・・、そう思えてならない。聞き届けた祈りの多さがますます神々しい存在へと変えていったのではないかと。

さらに**髷田亜紀子**さんは、当初から「**縄文のビーナス**」が特別な土偶として作られたと考えています。それはなぜでしょうか？

答えは、ほかの土偶とは異なる、特別な作り方をされていたからです。なぜ、それがわかるかというと、掘り出された後にコンピューター断層撮影装置を使用してX線写真の撮影をしたからです。

その結果、彼女は単純に粘土の塊を寄り合わせたり繋いでいく一般的な技法で作られているのではないことが判明している。まずビーナスをイメージした骨組みを作り、それを軸に頭、両腕、腹、左右の尻、両足の8つのパートに分けて肉付けされていたのである。そしてキラキラと輝くように金雲母を練り込んだ粘土で、わざわざ表面を覆われていた。

そういえば、京都国立博物館の国宝展で「縄文のビーナス」を観たとき（照明が落とされた暗い会場の中に土偶たちは別々のガラスケースに入れられ、ピンスポットが当てられていました）、ほかの土偶と違ってキラキラ「光っていた」ように思えたのは、私の錯覚ではなくて、金雲母のせいだったのですね。とにかく身体の表面がツヤツヤしていたように感じました。

それにしても、下半身は、お尻も脚もどっしりとしていて安産をイメージできる体型になっていて、でも上半身を見ると乳房は小さく、ウエストもキュッと締まっています。「ダイナマイト・ボディ」って感じがしませんか。頭の形もおもしろいし、渦巻きの模様が見られます。渦巻き模様は帽子をかぶっているのか、それとも髪の毛を束ねているのか、どちらなのでしょう？

ただ正直に言うと、「縄文のビーナス」は名前負けしているように思います。なぜかという、丸顔ではあるけれど目はつり上がっていますし、おちょぼ口です。私には「ビーナス＝美人」というイメージがあるのですが、むしろ「肝っ玉母さん」のように思えます。確かに後ろ姿のお尻は逆ハート型でかわいいです。ちなみに、フランスで1998年に開催された展覧会のポスターにはハート型のお尻が魅力的な「縄文のビーナス」の後ろ姿が使われていたそうです。

あなたは、「縄文のビーナス」を観て、どう感じますか？

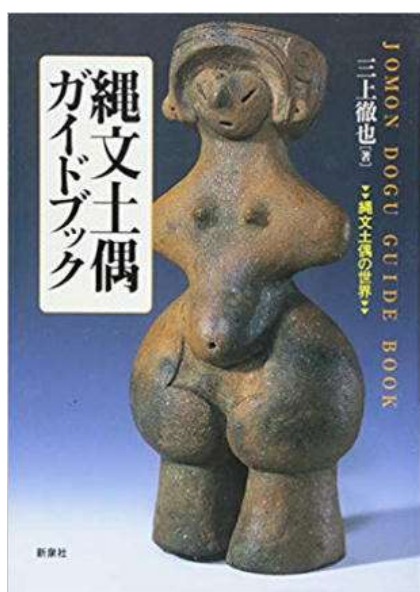
ちなみに、**三上徹也**氏の『**縄文土偶ガイドブック**』（新泉社、2014年）で三上氏は次のように考えています。

これだけの**大集落**です。中央の穴（墓など）の過密ぶりは、時に、先に作られた穴を後から作られた

穴が破壊する場合も決して少なくありません。しかし、その大きな環状広場のど真ん中にあった縄文のビーナスが埋葬された穴は、少しも破壊を受けていないのです。それだけではなく翡翠や琥珀で作られた装身具を納めた墓や、後期の完全な鉢を埋めた墓に、見事に取り囲まれているのです。

このことは何を意味するのでしょうか。少なくとも、土偶が作られた中期前葉からムラが廃絶するまでの後期までの長い期間、中央を常に意識してムラが設計・造営されていた、ということです。・・・・・・

縄文のビーナスは、作られて久しく、ずっと人々の前で生き続けたのではないのでしょうか。飛鳥時代や奈良時代に作られた仏像が、千数百年以上も経た今もなお現役であるかのように、女神像もそう簡単に現役を退いたものではない、と思えるのです。



では、棚畑遺跡で発見された「縄文のビーナス」はなぜ千数百年以上もムラの中央に置かれていたのでしょうか。実は約2万点も発見されている土偶ですが、ほぼ完全な形で発見されることはほとんどありません。バラバラになっているのが普通だし、高さが27cmという結構大きな土偶も珍しいです。

『縄文土偶ガイドブック』の三上徹也氏によれば、「縄文のビーナス」のような大きな土偶は、

共通の絆で結ばれた人々の地域連帯の象徴として、地域の中心となるムラにのみあったのではないのでしょうか。そして年に1度か2度、人々が集い政（まつりごと）を行う際に、見ることができたのではないのでしょうか。

では、何のために人々は遠くからわざわざ集ってきたのでしょうか。連帯の確認はもちろん、情報や物資の交換、豊饒祈願や感謝の祝いもあったでしょう。しかし、男女の出会いであった意義が一番であった気がしてなりません。

えーっ、男女の出会いのために、人々が集まるのですか？ そういえば、当時のムラの人口はせいぜい2、30人でしょうから、1つのムラの中に、結婚適齢期の男女が存在しないこともあったでしょう。万が一存在しても、血の交わりが濃くなるので同じムラ内の男女の結婚は避けられたでしょう。だとしたら、近隣の村々から人々が集まってくれば、男女の出会いの場が設けられることになります。

そして息の合ったカップルは夫婦となり、やがて文化の「礎」となる生命の誕生に至ります。新しい生命の誕生こそ、縄文人共通の切なる願いだったに違いありません。その象徴・シンボルに命を生み出す女神像こそ似つかわしいでしょう。・・・・・・・・・・・・・・・・

命のシンボルとしての縄文のビーナスは、最後まで大切にされ、手厚く埋納されたのでした。

ところで、縄文時代、出産の時に母親や乳児が死亡する割合は、今と比べれば相当高かったと思われます。そこで、質問です。新聞などでもよく見かけますが、人口の維持に必要な数字として2人以上の子どもを産む必要があると言われます。では、縄文時代に、人口を維持するため（子どもが成人に達するには）何人以上の子どもを産む必要があったのでしょうか？

答えは、なんと8人以上の子どもを産んで、ようやく可能だったそうです。

最大の土偶＝「縄文の女神」

2つめに紹介する土偶は「縄文の女神」です。2012（平成24）年9月6日に国宝に指定されました。

私が京都国立博物館の国宝展で出会った3体のなかでは、この女神が一番印象に残っています。なにせ、でかい！！そして、顔も身体もデフォルメされ、ウエストのくびれもスゴイ！！なんというプロポーションで！！まるで、八頭身の外国のモデルみたいです。



「縄文の女神」
写真は
ウィキペディアより

「縄文の女神」は土製の素焼きで作成され、非常に大型で安定感溢れる立像土偶です。高さは45cm、肩幅が16.8cm、股下が約15cm、重さが3.155kgあるんです。現存する日本最大の土偶、それが「縄文の女神」と言えます。一般的な土偶が15cmから20cmくらいなので、倍の大きさになります。なんと、人間の赤ちゃんくらいの大きさです！！

詳しく見ていきましょう。胴体部は両肩が左右に張り出しており、乳房は逆三角形で前方下方に垂れています。腰の部分は大きく後の方に屈曲し、お尻は緩やかに凸面を呈して無文となっていて、全体として良く研磨されていて光沢があります。

両脚は下の方で左右を連結させてあり、土偶に安定感を与えています。縄文中期（約4500年前）に作られた土偶です。なお、後で登場する「仮面の女神」は中空土偶ですが、「縄文の女神」は中が空洞ではないので、重量感があります。

発見されたのは、1992年の夏の真っ最中8月のこと。道路建設のため山形県最上郡船形町にある西ノ前遺跡で発掘調査をしていたところ、臀部、胸部、頭部、左右の脚部の5つのパーツが相次いで発見されたのです。

また、発見された場所というのが、すごいんです。生活に不要となった道具を廃棄した「落ち込み遺構」と呼ばれるもので、土偶の7割くらいはこの場所から発見されました。ほかにも出土品などの保管に使うケースで600箱ぐらいになる多量の土器が発見されました。足の踏み場もないほど土器が散乱しているという状況でした。

この落ち込み遺構から「縄文の女神」は発見されました。足の踏み場もないほど土器が散乱している中から土偶を探し出すという作業は大変だったようです。しかも、時期は8月ですから、熱中症になっても不思議ではないなか、地道な作業が続けられていったのです。

さて、**5つのパーツはどのような順番で発見されたか**、あなたは想像できますか？

実は、**最初に見つけたのが頭部や臀部**で、各パーツをつなぎ合わせることができたので、1つの土偶が壊されたものであるということがわかったそうです。そして、**最後に脚**が発見され、完全な形に復元されることになりました。

各パーツは半径3mくらいの直径の円に収まる範囲内で発見されたそうです。ほかの小さな土偶は、パーツの一部しか発見されず、全てを接合しようとしても完全な形にはならなかったと言います。その点、「縄文の女神」だけは、完全な形になったのですが、故意に狭い範囲に埋めたのではないかという意見もあります。はっきり言えることは、ここまで作り上げられた素晴らしい土偶なので、特別な価値のある土偶だったに違いありません。

「縄文の女神」は赤粘土で仕上げをしているため全体的に赤褐色で、表面は丁寧に研磨されています。下半身はまるでパンタロン（昔流行った、先が広がったズボン）をはいているかのような姿が特徴的です。顔は具体的には描かれていない、つまり**「顔がない」**のですが、上を向いているようにも見えます。

どうして顔がないのでしょうか？後で登場してくる「仮面の女神」の場合も仮面を被っているため、当然ですが顔がありません（描かれていません）。ただ、小さい穴が2つあるので、それが目なのかもしれません。あえて顔の表情を描かなかったのかもしれませんが。

そう言えば、平安時代の院政期に描かれた『源氏物語絵巻』では、登場する人物の顔は「引目鉤鼻」で描かれており、皆同じ顔に見えます。見ている者が登場人物の顔の表情を「想像」してみるようになっていますが、それと同じ趣向なのでしょうか？それとも、シャーマンが呪（まじな）いで使用する場合、どんな人にも対応できるように、わざと顔を描かなかったのでしょうか？

ところで、西ノ前遺跡で発見された土偶は「縄文の女神」だけではありません。ほかにも、頭部から脚部までの土偶の断片が見つっています。しかし、これらの断片はつなぎ合わせられるものが1つもありませんでした。不思議じゃないですか？「縄文の女神」は主に5つに割れていましたが、1つに「統合」できました。しかも、4500年ほどの時を経て、1つにつながったのです。ところが、それ以外の土偶はただの1体も復元できなかったというのです。ですから、ばらばらにしていろいろな場所に埋めたのではないかと思います。これらの断片**「残欠47点」**は「縄文の女神」とともに国宝に指定されています。

なぜ「残欠47点」は粉々に破壊され、「縄文の女神」は破壊されていなかったのでしょうか？ 作者の**譽田亜紀子**さんは次のように考えています。

まず、土偶は壊される存在であった。病気治癒など、直接的な願掛けをするために用いられた日常的な呪術の道具だったのだろう。患っている部分があれば、土偶の同じ場所を壊すことで、痛みを土偶に肩代わりさせ、早く治るように祈願したというのは、しばしば唱えられている土偶の用途の一つである。一方、縄文の女神はそれとは一線を劃す存在だったのではないか。たとえばシャーマンの相棒として、儀礼の際に霊的存在に対して祈るために使われた道具だったとは考えられないだろうか。だから、縄文の女神はあれほどまでに大きく、美しい立ち姿をしていた。そして、役目を終えたとき、土偶に宿った力を奪うために、人々は5つに割はしたけれど、願いを聞き届けてくれるものとして今まで大切にされてきた女神の尊厳を守るように1カ所に埋めたとは考えられないだろうか。

縄文時代は長いので、6つの時代に分けられています。そして、縄文文化が最も隆盛をほこったと考えられるのが「中期」です。自然環境が安定し、食料が増えると人々に栄養が行き渡るようになり、人口は増加し、集落の規模も大小様々なものがあつたでしょう。縄文時代中期には土偶も大きいものが作られています。縄文のビーナスと同様に、村の中心に集まった人々から見やすくするには土偶を「大型化」するのが一番ですよね。

実は女神の大きさは、土器の大きさに連動しているようなのです。中期の東北地方では軒並み土器が大型化して（新潟県で発見された火焰形土器も中期に作られて）います。縄文の女神が生まれた山形県では、現在全国で2位の高さを誇る89cmの巨大な土器も見つかっています。

次号に続く